

---

# オン・ザ・ピッチ ~サッカーに関するお話~

Uraih Heep

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オン・ザ・ピッチ～サッカーに関するお話し～

### 【Zコード】

N4912D

### 【作者名】

Urain Heep

### 【あらすじ】

富崎県都城の地域リーグからJリーグ入りを目指して奮闘する青春群像を描くリアルサカつく小説の決定版！（ホントかよ）

## プロローグ

かれらは、集い、戦い、また去っていく。

（古代ギリシャ叙事詩断片より）

1

竹富健一は高校卒業後、福岡市内にある板金会社に就職したが、1年でもどつてきた。

給料があまりに安すぎたこともあつたが、原因はそればかりではなかつた。職場の上司があまりに嫌な奴だつたせいである。

新人の健一の目から見ても、その男は板金工として必要な技術がなかつた。かわりに口先ばかり発達していて、同族会社の2代目社長におべんぢやらばかり使つていた。

こういう男の常として、目下の者への扱いがひどく、健一はある朝とうとうアタマに来て、正面切つて食つてかかり、「それならキミ、明日から来なくていいよ」と言われたので、「じゃあ、辞めます!」といつて、そのまま会社から帰つてしまつた。それ以来、会社には顔を出していない。

その上司と2代目社長は、2度、健一のアパートを訪ねてきて、戻るようになって説得したが、彼は頑として聞き入れなかつた。

彼はその月のうちにアパートを引き払い、故郷の宮崎に帰つた。給与の残りと、わずかばかりの退職金（2万円だつた）は、その翌月

2

に銀行に振り込まれてきた。

2

かれの実家は都城市にある。父親は市役所に務めており、看護師を  
している母親と、高校1年になる弟がいる。

小学校のときからサッカーばかりやっていた健一は、昔から、あまりデキの良い長男とはいえたかった。成績は悪かったし、素行についても優良とは言えなかつた。

高校2年のときの大ケガさえなければ、ひょっとしたらサッカー特待生として有名大学に進めたかも知れない。母親はときどきそういう悔やみ言を控えめに言つていた。しかし、それは親のひいき目にすぎないかもしれない。無事にいつたとしても、結局たいした選手にはなれなかつたかもしれない。

健一自身は、いまさらどうこう思つていなかつた。大学生が、高校時代の成績をいつさい思い出さないと同様、2年以上も前のサッカークラブでの活動を思い出すこともなかつた。

家に帰つてきた健一を、両親も弟も、暖かく歓迎してくれたのは意外だつたが、居心地は悪かつた。

正月に帰郷したおり、自分がどれだけ社長から期待されているか、板金の仕事がどれだけハードであるかを吹聴する一方で、父親や母親の曖昧な仕事意識を批判したばかりだつたので、カツコ悪くてしかたがなかつた。

健一は、3日目に勤けはじめた。市内のラーメン屋でのアルバイトである。

両親も弟も、これにはあまりいい顔をしなかった。もつとましな仕事があるだらうといつてある。

弟は、その店が学校の帰り道にあるので、兄が働いているのがバレると恥ずかしいと言つた。

かれにはその感覚がどうも良く分からなくてほつとおいた。

梅ヶ谷一郎と知り合つたのは、その店のことだった。

3

梅ヶ谷一郎は健一より一歳年上。

半年ほど前からその店で働いていた。

バイトの先輩として、店の中ではこねばん話をしやすかつた。

あるとき、店のテレビでサッカーをやつていて、普段は関心を示さない梅ヶ谷が、チラチラとそちらを見ているのに気がついた。

昼間の客がしばしどきれた間、梅ヶ谷はさつそく流し場を離れ、天井近くに備え付けられた古いテレビを仰ぎ見ていた。

「サッカーが好きなんですか」

健一もその後ろからテレビを眺めながら尋ねた。

「ああ」

梅ヶ谷は視線を離さずに答えた。

「これはどこどどいがやつてているんですか」

健一はサッカーを断念したときに、それまでマニアックに集めていた雑誌や録画を全部捨てていた。それ以来サッカーに関する記事も

番組は見ていないので、画面に映っているチームの名前がわからなかつた。そつやらリーグの試合らしかつたが。

「ザスパとアビスパ」

「アビスパ福岡ですか。ザスパというのはどいですか？」

「草津。ザスパ草津。あちや、惜しいな」

「その前にオフサイド」

梅ヶ谷は振り向きかけたが、すぐ視線をもどした。

「オフサイド？ いまのが？」

「遠いサイドの選手が残つてませんでした？ 線審の旗は遅かつたけど」

「うん」

「ザスパを応援しているんですか」

「いや。アビスパの方かな。九州だから。」

「ザスパって知らないな。昔はなかつたけど」

ザスパ草津が珍しいと言つより、サッカーそのものが珍しかつた。

「ザスパはけつこう前からあつたよ。J2に来てもう4年間になるし」

「ああ、J2ですか」

J2には昔から関心がなかつたので、わからないのも当然だつた。福岡に住んでいたので、さすがにアビスパ福岡の名前は知つていたが。

「オマエラええ加減にせい！ なにサポッとするんだ！」

店長の怒声で、二人はあわてて流しに戻つた。

二人でどんぶりを洗いながら、梅ヶ谷は、

「健一君は、サッカーに興味はないんね」

「いや、まあ。そういうわけではないけど」

「やっぱ、野球ファン？」

「いや、野球は見ないです」

「やつ。あんまり運動とかせんとやるね」

「まあ、そうですね」

「高校で部活しどつた?」

「はあ、まあ一応。」

「何部?」

サッカーとは、なぜか言いづらかった。

「まあ、あれですね、いろいろ。あんまり続かなかつたし」

4

梅ヶ谷は急に話題を変えた。

「来週の土曜日は予定ある?」

もちろん何の予定もなかつた。

「なにかあるんですか?」

「俺が入っているサッカーチームの試合があるんだけど、見にこんかね。」

社会人のチーム同士の試合らしい。

健一を誘つたのは、もちろんその試合に参加してくれといつてではなくて、その後の懇親会に若い娘たちがくるので、それに合流しないかといつものだつた。

「いやあ、オレはいいですよ。合図みたいのは苦手なんで」

「まあそう言わんと。ヒマじゅうひつが」

「それよりも、梅ヶ谷さんは試合に出るんですか

「まあな」

梅ヶ谷はそのチームでリラックスタイプのリーダーをやつてゐると言つた。

「それはちょっと見てみたいですね」

「なり来いよ」

「まあ、どうなるかわかりませんけど」

「場所は扇山運動公園な。時間は14時から。ま、試合はどいつもいいけど、飲み会は18時から。」

「はあ。考えときます。場所は?」

「場所? ああ、飲み会の方ね。次郎平という居酒屋じゃ。」

梅ヶ谷は居酒屋の場所を説明してくれた。市内のどちらあたりかだいたい見当がついた。

場所が分からなかつたら電話してくれと、携帯の番号を教えてくれた。

酒が飲める方ではなかつたので、気乗りはしなかつたが、その時になつたら、行つてみよつといつ氣になつてゐるかもしだいなと思った。

ついでにサッカー観戦というのもいいかもしだい。ポカポカ陽気の中で、散歩がてらに運動公園でのんびり過ごすといつのは悪くない考えだ。

その風景の中に女性がいないのが大きな欠陥だが、今度の飲み会で探してみのもいいかもしだい。

何歳ぐらいの女の子がくるのか聞いてみた。

女性は全員で20人ぐらいで、10代も2、3人いるといつ。

10代と20代をあわせると半分ぐらいそ占め、かなり可愛い子も多いらしい。

健二はひそびたに楽しい気分になつてきた。

テレビからふいに大きな声が流れた。梅ヶ谷がセツとテレビのところに行き、すぐ戻ってきた。

チツと舌打ちしたので、どうしたのか聞いてみた。

「馬鹿。オウンゴールやで。」

「どつちがです?」

「アビスパ。佐藤。」

「ザスパの勝ちですか?」

「いや、2-2だけど、後半の43分に追いつかれよつた。アビスパは今日2個目のオウンゴールや。」

ああ、それは大変だ。

だけど、J2の底辺の試合では、そんなことも起こりうるんだろ?。そういうチームを応援するサポーターは、自分たちが好きでやっていふとはいえ、ほんとうに災難だ。

5

3月の扇山運動公園は、思つたよりも寒かつた。風はなかつたが、雲が厚く、陽が射さなかつた。

扇山運動公園では、健二もむかし試合をしたことがある。引き分けだつたような気がするが、よく覚えていない。

グラウンドでは選手たちが準備運動をしていた。

両方のチームともユニフォームがばらばらなので、梅ヶ谷のいるチームがどつちか分からなかつたが、しばらく見ていると、選手たちにいろいろ指示しているのが彼だと分かつた。

バイト先で見るよりもズんぐりして見える。太つているからではな

く、胸板の厚さと発達した太腿のせいだった。

観客はほとんどいなかつた。まもなく試合が始まった。

ハーフウェイラインあたりの芝生席に腰を下ろし、ポケットに入れてきた缶コーヒーのホットを飲みながら観戦することにした。

選手たちは、着ている服同様、年齢もばらばらだった。細いけれども柔軟で軽快な身のこなしの選手はたぶん高校生だろう。腹の出で足取りのおぼつかない選手は、かなり年がいっているようだ。どちらのチームも同じようなものだった。

両チームがどたばたと入り乱れる中で、梅ヶ谷の動きだけは異彩をはなつていた。ボールが彼に渡ったときだけ、ぴたりと静止し、そこから意図と目的を持つたパスが前線に送り出された。彼のところだけ秩序があつた。受け手の選手たちはがラップミスやショートミスを繰り返すおかげで、得点までは至らなかつたが。そういうことはまるで意に介していなかのように、梅ヶ谷は繰り返し繰り返しパスを送り続けた。

もう一人目だつていたのは、梅ヶ谷のチームのゴールキーパーだつた。敵が攻め込んでくる機会が少なかつたので出番はほとんどなかつたが、ゴールキックの精確さに目をみはらせるものがあつた。狙い澄ましたボールがセンターサークル付近の梅ヶ谷に送られると、さして背が高くはない梅ヶ谷がごとくヘッドに競り勝ち、マイボールにしていた。

両チームを含め、サッカーらしいサッカーをやっているのは梅ヶ谷とゴールキーパーの2人だけといつてよかつた。あの選手は、ボールをむやみに追いかけ蹴つて転がしているだけだ。

0-0のままハーフタイムに入った。

健二は梅ヶ谷たちが休んでいるところに下りていった。彼に気がついたらしく、ハーフタイム前に手を振ってきたからである。

選手たちはベンチに座って、飲み物を飲んでいた。応援の家族や知り合いも集まっていた。手作りの弁当やビールを飲んでいる。選手たちの何人かも缶ビールを手にしていた。小学校の運動会という雰囲気だ。

「試合を見に来るのは思わんかった」

梅ヶ谷がにこやかに近づいて来て言った。スポーツドリンクを手にしていた。

「梅ヶ谷さん、すごいですね。あんなに巧いとは思わなかつた」「まあまあだけどな」

「これ、なんの試合なんですか」

「練習時代じや。来月から公式戦があるので、今年はじめてメンバーが集まって試合をすることになった。まだ、背番号もきまつていけどな」

集まつた人々の中には若い女の子もいるにはいたが、小学生や中学生だつた。もちろん選手達の子供だらう。なんだか話が違うなあと思つてゐると、おい、竹富じやないか、と呼ぶ声がした。

選手の一人になつてゐる若い男が歩み寄つてきてた。

赤い上下のトレーナーを着て、片手に灰皿代わりの空のビール缶を持つていた。

「高倉だけど、わかるか」

名前を聞いて思い出した。

サッカー部の2年先輩だ。あまり話したことにはなかつたので、さつ  
と思い浮かばなかつたのだ。

「」無沙汰です」

「久しぶりだなあ。何年ぶりだ? 卒業して以来だから、3年ぶり  
かな」

「先輩、いまどちらに?」

「いま? 大学3年。そういうえばおまえ」

高倉は一步下がつて、健一の頭から足下までを改めて眺めた。

「ケガをしてたんじやなかつたのか」

そのとぎ、ベンチのむこうから、誰かが走つてきてた。

「おにいちゃん」

息せき切つて駆けつけてきたのは、髪をおさげにした若い娘だつた。  
セーラー服に見覚えがあつた。健一の高校の制服だつた。  
健一と高倉の遭遇を興味深そうにながめていた梅ヶ谷が「どうした」  
と応えた。

「神屋さんがたいへん!」と叫び、「あつちあつち」と手をひつぱ  
つて連れて行こうとしている。

「高倉さんも早く! 倒れたんだつて!」

梅ヶ谷と高倉は顔を見合させ、それから、その娘のあとを追つて走  
りだした。

選手たちと応援の人々の動きが慌ただしくなり、いろんな方向に人が走つていつたり、何人かで話しあっていた。相手チームの選手も集まってきた。

健一はどうすることもできないので、その場を離れ、ぶらぶらともとの芝生席に戻った。

神屋という人物のことをまったく知らないので、この場にいても関わりようがない。

芝生席に座つてグラウンドの様子を眺めながら、なんだか間が悪いなど考えた。これでは飲み会が行われるかどうか分からぬ。中止になることが残念というよりも、梅ヶ谷がそのことで健一に申し訳ないと思って氣を使つことがいやだつた。

面倒なのでこのまま帰りたいなと思ったが、それではもつと気にするだろうから、一言あいさつは必要だ。

ままもなく、外から救急車のピー・ピー音が聞こえ始めた。グラウンドに担架を持つた救急士が二名入ってきた。白衣にレッドクロスの入った白いヘルメットをかぶつている。

運ばれたのはどうやら、あのゴールキーパーのようだ。家族が何名かと選手が一人、担架といつしょにグラウンドから出て行つた。

どうなるんだろうと思つていると、こちらに向かつて梅ヶ谷と赤いトレーナーの高倉が走つてきた。健一の方から声をかけた。

「大丈夫ですか。キーパーの人だったでしょう

梅ヶ谷は苦笑いをしながら

「ぎつくり腰だつて」

「そうですか」

「神屋さんももう年だからなあ。もうびっくりさせんなあ

高倉はそう言つて笑つた。

健二もつられて思わず笑つた。

「健二くん、それで頼みがあるんだけれど」

梅ヶ谷が言つた。

「メンバーが2人欠けて、9人しかいないんで、ちょっと手伝つてくれんかね。高倉から聞いたけど、サッカーの経験あるんじゃろ」

「足の方はもう大丈夫なんだろ?」

健二は、2年先輩の高倉がケガのことをなぜ知っているんだろうと思つた。高倉が卒業してから後のことだ。

返事を渋つていると思ったのか、梅ヶ谷が、

「キーパーだから、そんなに足には負担にならんと思つし。キックは高倉に任せればいいし」

「そう。頼むよ。せつかく出てきてもうつた相手にも申し訳なくつてさ」

健二は足が心配というより、長い間のブランクで、選手たちに迷惑をかけるだけではないかと思つた。

「しかし、クツもないし。そんな格好もしてないし」

かれはジーンズとスニーカーだった。

「格好はさあ、別にそのままでいいよ。俺たちもこんなふうだし。グローブは神屋さんのをそのまま使ってもらつて」

「練習試合じゃから、固く考へんでもいいから。軽い運動のつもりで参加してくれれば」

ピッチに立つのは2年ぶりだが、さして緊張はなかつた。  
入念に準備運動を行い、左膝の調子を確かめた。

高校2年のときのケガは左膝の靭帯損傷で、手術とリハビリに1年間かかつた。

3年の夏には、走つたり泳いだりすることはOKになつていたが、サッカーは辞めてしまつたので、あれ以来ボールに触わつていなかれも梅ヶ谷と同じく、高校時代のポジションはミッドフィルダーだつた。キーパーの経験はなかつたが、前半の試合レベルを見ていて、たぶん、なんとかなるだろうと思つた。

円陣を組むとき、梅ヶ谷がメンバーに彼を紹介した。

都城東高校サッカー部のレギュラーだつたと高倉が付け加えると、「それはいい」「強力な助つ人だ」と口々に言つて、ひとりひとりが握手を求めてきた。

大きな手袋をはめて、ゴール前に立つと、味方のベンチから「竹富さん、頑張つて～」という大きな声があがつた。梅ヶ谷の妹の声だつた。

健一は急にどきまきして、ヘタなプレーはできないなと思つて、グローブのボタンをもう一度確かめると、腰を落として身構えた。

キックオフ。

一人減つたことにより、相手チームが攻勢に出でてくるよになつた。健一は2度シユートを受けた。

うまくキッチャし、右サイドバックの高倉にボールを投げ返した。

3度目はしかし、まずかった。

相手のロングボールが走り込んだ敵フォワードの頭越し、健一の前でワンバウンドした。反射的に右手を伸ばしたが、ボールはそのまま下をゆっくり通りすぎ、あわてて追つたが、口ロコロと転がつてゴールに入ってしまった。

失点。とても不細工な取られ方だった。メンバーが集まって、「どんまい、どんまい」と声をかけたが、アチャカ」という表情は隠せなかつた。

後半がはじまってまだ15分。今度は味方が攻勢をかけた。赤いトレーナーの高倉の動きが激しくなり、何度もサイドを往復した。

高倉は高校時代、たしかレギュラーではなかつた。それで健一の印象が薄かつたのだが、後ろから見ていると、それなりにボールの扱いはうまかつた。

梅ヶ谷も上がりっぱなしになり、ドリブルで相手を2、3人抜いてシューートを放つが、密集した相手選手の壁に跳ね返された。

跳ね返つたボールがときおり相手フォワードに渡り、こちらのボールに向かつて突進してくる場面が増えてきた。そのうちの2回は、いそいで駆け戻ってきた高倉がコーナーに追い込んでピンチを防いだ。

そのうちの2回は、相手がシューートミスして、ボールはとんでもない方向に飛んでいった。

そのうちの1回は、フォワードがドリブル中にボールを踏みつけて転んでしまつた。その間に健一がボールをクリアして事なきを得た。

相手FWは髪が薄い年配の選手で、そのころには息切れが激しく、顔全体から汗を流しながら、もうキーパーと勝負する場面は勘弁してくれという顔をしていた。

相手選手ばかりでなく、味方の選手もかなり疲れてきた。とくに高倉は青息吐息だった。

コーナーキックで自陣のゴール前に集まつたとき、「次、キーパー交代頼むな」と言つてきた。

健一に異存はなかつた。

何度もゴールキックをしてみて、最初はおつかなびっくりだつたが、足は大丈夫だという自信がでてきた。かなり強く蹴つてみて、昔どおり、狙つた場所にきちんと蹴ることができるという感覚が戻つてきた。

一度、ハーフウェイラインの向こう側の梅ヶ谷の足下にロングキックをぴたりと届け、自信がさらに深まつた。梅ヶ谷がびっくりしてこちらを向いた瞬間に後ろから倒され、チャンスには結びつかなかつたが。

高倉が審判に告げて、高倉がゴールキーパーに、健一が右サイドに替わつた。

梅ヶ谷が「無理しなくともいいぞ」と声をかけてきた。  
「健一さん、頑張つて」という妹の声が聞こえた。

汚名挽回のチャンスだ。

相手も選手を替えてきた。

3人が出て、3人が入つた。

難行を続けていた相手フォワードもそのうちの一人だ。

健一のチームに交代要員はいない。

彼の対面に入ってきたのは、ひょろとした選手だった。色が黒い。外国人だ。

しかし健一がびっくりしたのはそのことではない。女の選手だった。髪を後で束ねている。華奢な体つきで、ぶつかると骨が折れそうだ。なんでもりなんだなと彼は思った。だが、相手がパワーダウンしてくれた方がいいにきまっている。

試合再開。

健一はさつそく攻め上がった。

梅ヶ谷が逆サイドからボールをよこした。

前が空いていたのでドリブルで持ち上がった。後ろから追いついてきたのが気配で分かった。

急ブレーキで切り返そうと思つたとき、ボールが足下にないのに気づいた。

ふりかえると、さきほどの選手が遠くに駆け去るうとしている。ボールはその足下にあつた。追いつきには距離がありすぎた。

一人が抜かれ、かなり遠いところからショートが放たれた。横つ飛びに飛んだ高倉の両手をすりぬけ、右コーナーぎりぎりに決まった。

0 - 2。

健一は呆然とした。高倉も、ほかの選手も同様だった。相手チームの選手もびっくりしている。

「すげえな、今の」

梅ヶ谷が隣に来ていた。

「あれで中3だつて」

それから、健一の肩をポンとたたき、

「残り5分だ。頑張つていこう」

と言つてセンターサークルに戻つていった。

試合は、終了間際に梅ヶ谷のフリーキックで一点を返したものの、  
結局1-2で敗れた。

健一がサイドバックをやつたのはわずか十分たらずだったが、なにもできずに終わつた。相手の少女に振り回されっぱなしになつた。運動不足のつけて、息が切れた。

選手達は試合結果は気にしていなかつた。その場で着替えながら、話題は懇親会の会場に行くのに、誰が誰の車に乗つて行けばいいかといつことになつていて。これで思う存分酒が飲めるぞといつ雰囲気になつていた。

健一は梅ヶ谷に訊ねてみた。

「あの選手は何者ですか」

「ああ、あの中学生？ すまんね、ちょっときつかったらうな」

「ええ。歯が立ちませんでした」

「そんなこともないだらうけど。転校生らしこよ。すいこのがいるつていう話だつたけど、俺も今日はじめて見た。噂通りだな」

「転校生？ 外人じゃないんですか」

「アメリカかどつかの国のハーフらしによ。よくは知らんけど。それより、膝の具合はどうだつた。高倉からケガのことは聞いたけど左膝にすこし熱があるようだつた。ひさしごりなので、それくらいのことはしようがないと思つた。

「まあ、なんとか」

「そりか。じゃあ俺が車に乗つけていくから」

「いや、オレ、今日はちょっとやめときます」

「ええ？ ナンダコ。試合にも出てくれたのに、それはないじやろ」

「ちゅうと用事があるんで。じつはそれを畠中ひでと今口ひでに来た  
んですよ」

高倉が割り込んできた。

「なんだ、竹宮、来ないのか」

「ええ。足の具合のこともちゅうとあるんで」

「そうなのか。替わつてもらつたのが悪かつたかな」

「いや、そんなことはないですけども。楽しかつたですよ」

「竹宮さん、来ないんですか。来てくださいよお」

梅ヶ谷の妹だつた。

わざとウルウルした訴える目をしていろ。けつじつ調子がいい。

健一はどいつもこの妹が苦手になりそつだつた。

「じゃあ、すいません。時間なんで。機会があつたらまた呼んでく  
ださー」

妹にはかまわづ梅ヶ谷と高倉にそつれて別れた。

最後の言葉はその場かぎりの挨拶で言つたことだが、まつたくの嘘  
とこつわけでもなかつた。

華山良輔は病院の隣にあるフラワーショップで5000円の花束を買った。

両手に抱えきれないくらい大きな花束だった。  
お見舞いにしては大げさすぎるかなと思ったが、店員がこれぐらいの値段がふつうですよと言つたので、それに従つた。

受付の看護婦に聞いて、3階までエレベーターで上がつた。  
大きな病室にノックして入ると、部屋は8人部屋で、見舞いの相手はベッドは一番奥にあつた。

「あり、社長さん、わざわざすみません」

ベッドの向こう側から、神屋の妻がすぐに気がついて立ち上がつた。  
背中を向けていた若い女もこちらを振り向いて挨拶した。一人娘の香美柚だ。

ベッドの主である神屋慎一郎は折りたたみ用のベットの上半分を少し高くして、横向きに寝ていた。無精ひげが生えている。

「もう社長じゃないですよ。」

といつて妻に花束を渡した。そのままではやはり置き場所に困るかもしれない。香美柚が妻から受け取つて、部屋から出て行つた。水に漬けにいったのだらつ。

「神屋さん、どうですか」

「いや、もうだいぶんよくなつた。明日には退院する予定で」

「大丈夫ですか」

妻の方を見た。

「ええ。先生もそうおっしゃってくれて。しばらくは家で静かにしないなくちゃいけないんですけど」

「じゃあ、まにあつたわけですか。」

「お見舞いにいらしたのが？」

「そり。」

「社長、そんなに氣を遣つてくれんでもいいですよ。たいしたケガでもないのに」

神屋が口をはさんだ。

「まあ、年寄りの冷や水とはこのことだから、実物を一度おがんどうかないといけないと思ってね」

華山は笑つた。神屋もそれにつられそうになつたが、口元をゆがめただけだった。腰に響くのをおそれたのだろう。

「で、試合はどうでした。なんとかなりそうですか」

「いや、申し訳ないですが、前半しか見れなかつたんです。ハーフタイムに運ばれたもので。」神屋の口調がちょっと改まり、仕事の打ち合わせをしているときのような調子になつた。「それで、昨日、梅ヶ谷に来てもらい、評価を聞かせてもらつたんです」

「梅ヶ谷というと、あの…」

「そうです。うちのコーチ格です。彼だけは別格。」

神屋の妻がそつと席をはずした。華山は会釈してその後を見送つた。

「なんて言つてました」

「使えるのは、うちのチームで2人。高倉と進藤。高倉はサイドバック。進藤はディフェンスの選手。それとオレと梅ヶ谷を含めて4人。相手のところからは2人。2人ともディフェンスです」

「なんだ。ディフェンスばかりじゃないですか」

「そうです。これで6人」

「全然足りないです」

「そり。全然足りない」

華山は腕組みをした。「やつぱり厳しいですか」

「まあ、あと2人、可能性があるかもしけないとは言つてましたが」「誰です」華山は窓の外に目をやりながら訊ねた。三階の窓からは、縁が燐めきはじめた春の木々が見える。

「一人はケガでサッカーを中断していた選手。まだ若い。たしか今年20かな」

「ポジションは?」

「サイドバックで使ってみたらしい」

「またディフェンダーか」

「もう一人もサイドバックで出てたんですが、こつちはフォワードかミッドフィルダーで使ってみた方がいいと言つてましたね」

「やつと前の選手か」

「これは若い。中3です」

「おお」

「見事なミドルショートを決めたようです」

「それはそれは」

「キーパーが一歩も動けず」

「なんと」

「しかし女です」

「えええ」

「残念ですな」

「神屋さん、私をからかってませんか」

「いや、そんなことはないです」神屋は真面目な顔で言つた。

募集をやろう」

「新聞といふと、『高崎田々新聞ですか』

「それぐらいでいいでしょ」

「そいつはす”いな」

「締め切りはいつ”いこしますかね」

「締め切りと”いと？」

「締め切りと”いが、選考会みたいなものがいるんじやないかな」

「ああ、セレクションが必要でしょうね。そうだな、今月中には選手をある程度固めておかなきゃならんから、31日でどうでしょか。たしか日曜日だつたはずです。その日にセレクションをやって、その場で決めてしまえばいい」

「31日とすると、10日後か。神屋さん、腰は大丈夫ですか」

「なんとかなるでしょ。万ーのときは、代理を頼めばいいし梅ヶ谷のことを言つてこらのだらうと華山は思いながら、続けて「場所はどこで」

「扇山運動公園が便利でいいでしょが、まあ、それはどこでも」

「場所を借りる手配がいりますね」

「それはこつちで誰かに頼んでやつときましょ」

「時間は何時からにしますか」

「13時ぐらいがいいですな」

そこまで決まれば、明日、神屋のサッカークラブの誰かから会場確保の電話をもらつて、あさつてには広告を出せる。

広告とセレクションの間の期間が短いのが心配だが、神屋の方でも知り合いのチームのチームたちに連絡をとつてPRしておくことになつた。

神屋が言つた。

「チーム登録は先にすましておく必要があるので、うちのクラブと、伊藤町のクラブ、この前の試合の相手なんだけど、合同チームを結成するところ」と、県のサッカー協会には届出を出しました。

」

「なるほど。むにひにまだ挨拶してなかつたですね」

「どつちみち一緒になる予定だつたんで、それはまだいいんじやないですか。クラブの選手はとりあえず全員、新しいチームに入ることになるんで、万が一、セレクションの人数が少なくて、合わせれば20人はいるので、まあ、格好はつくでしよう」

華山がうなずくのを見て、神屋が続けた。

「それと、チーム名はヴァロール都城で登録しちきました」

ヴァロールはスペイン語で勇気という意味である。これは華山が神屋と話し合つて、前から決めておいた名前である。

華山がいった。

「そうすると、そろそろゴーニフォームがいりますね」

「そうですな」

「発注しちましょ」

「お願いします」

「セレクションのときには、いまのクラブの選手に渡せるようこじきましょ」

「それはいいですな」

「それからもうひとつ」と華山は言いかけて、神屋の妻が病室の入り口から顔をのぞかせ、またひっこめたのに気がついた。そろそろ暇乞いの時間だ。なんといっても見舞いにきてこるわけで、あまり負担をかけてはいけない。

「ホームページを立ち上げようと思つんだけど、だれか手伝ってくれる人はいないかな」

「ホームページ」神屋が繰り返した。「手伝いといつと?」

「業者に作らせるけど、中身を考えてくれる人間が要る。ある程度サッカーに詳しい方がいいけど、そうでなくてもいいかもしない。とりあえずは、ときどき更新してくれれば。アルバイトでもいいと思つけど」

「そうですね」といつて、神屋はふと思いついたよつて「うひ」の

香美柚はどうかな。パソコンでもきるし」

「ああ、香美ちゃんか。それは助かるな。」

神屋の一人娘である香美柚のことは、彼女が小学生のときから知っていた。華山の娘とほぼ同じ年頃のはずである。

たしか昨年、東京の大学を卒業し、地元の会社に戻つて事務員をやつてはいるはずだ。昔から目鼻立ちがくつきりした女の子で、大人しくしていても人中で目立つタイプだった。さきほど久しぶりにみかけ、美貌がさらに輝きをましていることに気づいた。

「どこにいったんだらう。もどつてきませんね」

ああいう美人は眺めているだけで目の保養になるのだと、華山はまつたく関係ないことを思った。

「どこかで油を売つてるんでしょう。あとで話しておきますよ」

「そうですか、それは残念だ」

そろそろおないとましますといいかけて、華山はもう一つ言い残したこと気に気づいた。

「例の福岡の3人だけど

「おう、どうなつてます」

「セレクションには来れないかもしれない。こっちに来る前に、仕事を決めとかないといけないらしい」

「あらら。それはまずいですな」

「まあ、無理もない。本人たちも、仕事がないのに、サッカーだけで富崎に来るわけにもいかないだらうから」

「でしおうな」

「それで、場合によつては、僕がこっちで会社をつくるかもしれない

い

「社長ですか」

「ええ、そこで雇つてしまおうかと。そこで仕事をしてもうつて、サッカーもできるよつてしようかなと。あの選手も、希望があれば雇えるよつにする」

「そこまでやりますか」

「まあ、それが一番てつとりばやいのかもしれないな」

「たしかに、そうすれば、いちばんいいんでしょうが。どんな会社をつくるんですか」

「たぶん、前の会社とおんなじだらうけど。ただ、時間がかかりそ  
うだから、3人の件はしばらくペンドティングだな」

「かれらがいないとなると、県予選はかなり厳しいですよ  
「わかつていてる。なんとかするよ」

妻の総子が戻ってきた。

彼女と一言二言世間話を交わし、華山は病室を出た。

香美柚は結局すがたをみせなかつた。

## 第2章 セレクション

1

都城からJリーグへ！ そして世界へ！  
～ヴァロール都城セレクションのお知らせ～

今年から都城地区リーグに参戦するヴァロール都城は、「都城からJリーグへ！ そして世界へ！」という夢を目指し、選手募集とセレクションを行います。

われこそはという方は、ぜひご参加ください。

### 【セレクション日程】

日時：3月31日（日） 13:00～

会場：都城市・扇山運動公園

### 【参加費】

1000円（保険料込み）

### 【資格】

年齢：16～30歳

### 【持参するもの】

簡単な履歴書。未成年は保護者の承諾書も

### 【テスト内容】

## ゲーム形式、他

## 【問合せ先】

電話：（担当  
神屋）

メル：

2

広告記事は宮崎日々新聞の社会面の下の方に、宮崎放送の春の新番組のPRとともに掲載されていた。拳ぐらいの大きさで、かなり目立っている。

新聞はどこのどこのに客がついたラーメンのシミがあり、ヨレヨレになつてゐる。

竹宮は顔を上げた。

向かいの席から梅ヶ谷がいつた。

「えへ、吸血鬼かね」

二人は、店の片隅で、昼飯のギョーザ定食を食べていた。

昼飯はタダだつた。それはありがたかつたが、アルバイトに出される食事はラーメン定食とギヨーザ定食の2種類しかなく、今日はギヨーザ定食の日だ。さすがに飽きてきたなと思いながら、竹宮は首を振つた。

「オレはひとつ無理ですよ。」の前の試合見たでしょ?」

「けつこう良かつたじゃないか。やるなあと思つたけど」「でも中学女子に負けたんではね」

あれは屈辱だった。見事にボールを奪われ、ショートまで行かれてしまった。

あのあと、梅ヶ谷から、女子の日本代表候補にもなっているらしいとこう話を聞いた。父親の仕事の関係で、都城に引っ越してきらしい。

しかし、女は女で男子とは比較にならない。女子の日本代表チームは、男子高校の強豪チームには敵わない。そういうレベルなのだ。そのレベルの選手に、あも簡単にボールを奪われるとは、それにキーパーとしても自分はオソマツすぎた。

この前の試合の2失点は、両方とも自分のせいだ。  
つまり負けは全部自分の責任だ。

梅ヶ谷は、試合の翌日も練習試合だから気にしないでくれと言つてきたが、竹富は聞き流した。その話はしたくなかった。その様子を察して梅ヶ谷は何日か声をかけるのも遠慮していたようだが、今日になつていきなり新聞を差し出してきたのである。

「オレは評価しているけどね」

梅ヶ谷は箸を置き、テーブル上のポットからコップに水を注いだ。  
「ブランク開けにしては上出来じゃね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4912d/>

---

オン・ザ・ピッチ ~サッカーに関するお話~

2010年10月10日01時36分発行